
ねぷ子奮闘記！

リアルではねぷ子タイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねぶ子奮闘記！

【Nコード】

N2759Y

【作者名】

リアルではねぶ子タイプ

【あらすじ】

マジエコノム又は倒され、平和になったゲームギョウ界。

しかし、世界は常に波乱と闘争を人々に求める。

何かがおかしい世界で、ネプテュー又はどう生き抜くのか……。

バリバリのギャグをヤリタッタダケー。クオリティは期待しないでください。

1 : : 災難が服着てやってきた(前書き)

何かがおかしいゲームギョウ界で、君(読者とネプテューヌ)はこの先生きのこれるかどうか！

: : すいません、やりたかったただけなんです

1・・・災難が服着てやってきた

朝。英語で言えばモーニング。

人間、女神。夜行性でもないかぎりめざまめの時間帯だ。

超次元美少女女神パープルハートこと私、ネプテューヌも気持ちいい朝を迎えることが出来なかった。

何故か。暗室の中で手錠までかけられて拘束されていたからだ。

……

「何故じゃあああああ？」

まてまて、まず情報を整理するんだねぶ子さん。

昨日、私は何処で寝た。

決まっている、私たちの部屋のベッド（もちろん上）だ。何か私には無い柔らかな感触を感じたところまでは覚えている。

3

……さてここで問題。ここまでの情報を考えて浮かぶ犯人とは？

- 1．ネプギア
- 2．いーすん
- 3．ノワール

……一切見当がつかん！

「ねぶぎあ〜？いーすん？のわ〜る〜？」

か細く声を出すも誰一人として答えてはくれない。

もー、ねぶ子さんは寂しいと死んじゃうんだぞー！

心の中で叫んでいると、階段を降りるような足音が聞こえた。足音があるってことは、いーすんじゃなさそうだけど……

「あ、お姉ちゃん。おはよう。」

……あなたでしたかまいしすたー！

どうやら、犯人は私の妹。超次元（ryその2。パープルシスターのネプギアだったようだ。

ああ、なけなしの姉の威厳が……。

「え〜つと、ネプギア？」

「なあにお姉ちゃん？」

「この手錠を解いてくれたら、それはとっても嬉しいなって…ね？」

「ダメだよお姉ちゃん。お姉ちゃんを自由にしていたらすぐワールさんとかに浮気しちゃうんだもん。」

「別に私とノワール付き合ってるからね！？それに女神がいないって仕事とか…！」

「お姉ちゃん元から仕事しないじゃん。」

「うぐつ……。」

あつと言う間に言い負かされ、外される理由がなくなってしまっ…わけないよ！

そもそも何で！？私いつからノワールと付き合ってることにされたの！？

「そもそもネプギア！お姉ちゃんをこんな目に合わせるなんて何！？反抗期！？」

「そんなことないよう。私、お姉ちゃん大好きだよ？」

「そりゃあお姉ちゃんもネプギア大好きだけど、この愛の形はちょっと重いかな〜って……。」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんの世話はずっと私がするから。」
「そういう問題じゃない！」

というか、冗談のつもりで言った愛の形ってこれ凶星ですかい……。
お姉ちゃんどちらかと言えば純愛派なのになあ……。

「ね、お姉ちゃん……?」

「ちょ、ネプギア……!?」

徐々に、ネプギアの顔が近づいてくる。この手錠が愛の形なんてことはこの後起こることなんて一つしかない。

そう、所謂ディーブ（かはわからないけど）キッス！

ちょ、マジ勘弁してネプギア！私（多分）ノーマルだから！それにまだファーストだから！

『ねえええぷううううぎいいああああああああん！』

「もう来た!？」

「この声、いーすん！」

突然、部屋に本が飛び込み、ネプギアの頭に本の角が直撃。

本が開くとおなじみ本の中の人、いーすんがいた。

こんな時ばかりは救世主だよいーすん！

「ネプギアさん？あなたはなんとこのことをしているんですか？」

「う、うううう………いたい……。」

いったれいったれ！。乙女のファーストキッスはおもいんだぞー。

「ぬけがけは許さないといつもいつているではありませんか！ネプ

ギアさんがそのようなことをするならば私にも考えがあります。」

いったれいったれ……あれ……？

「ならば私は、この本の中にネプテューヌさんを封印します！そして独り占めです！」

……

いーすんもだったアアアアアアアアアアアア！！！

え、何！？常識人私しかないの！？ヘルプ！誰だか……あいちゃん
とコンパー！ノワールー！誰かへるぷみー！

……あれ、手錠が外れた。

「したりい！プロセツサユニット、セツト！」

「ツ！？しまった！ネプギアさん！」

女神化し、一気に思考と視界がクリアになる。

これだけ性格が変わる女神というのも、私だけでしょうね。

「ネプギア、いーすん。悪いけど、私は捕まるのが大嫌いななの。」

プロセツサユニットのブースターを吹かし高速でネプギアといーすんの横を通り、外に出る。

今日初めての太陽光に、なんだか気分もはず……まないのよね、この状態だと。

とにかく、今プラネテューヌ又は危険ね……。ネプギアが言っていたことを考えるとノワールは危険かもしれ……。

とにかく、リーンボックスに行ってみましょう。ベールなら、何か

考え付くかもしれないからね。

1 : 災難が服着てやつてきた(後書き)

正直、すまんかった。

2・・・空は気合で走れるらしい(前書き)

カオスだからね！この作品9割がカオスとギャグでできてるからね
！あと1割は………適当！

2・・・空は気合で走れるらしい

数分でリンボックスに到着し、女神化を解除。

流石に女神姿で他国をうろつけるほど身の程知らずじゃあないからねえ。

つと、教会にとーちやく。扉を開け…………ると、誰もいなかった。留守かなー？

「おい、ベーるー。チカー。いないのー？」

むにゅ。

ふとそんな感じの効果音が聞こえた。

視線を下ろすと、後ろから私の憤ましやか（重要）な胸に、綺麗な手が二つ置かれていた。

多分、ベール。

……………ん？ベール？

「べ、ベーるう！？」

「何かしらネプテューヌ。今貴女の憤ましやかな胸の感触をととても深く味わっているのので後にして頂戴な。」

「頂戴な。じゃないって！何で私の胸もむのさ！」

「そこにネプテューヌがいたから、といきましょう。」

「ざけんなー！はーなーせー！」

ベールの腕をつかみ、そおいつと一本背負い投げ。

そのまま投げ飛ばすも、やっぱり女神かあっさり受け身を取られて着地される。

実力ある変態ってこわいね！。

「クツ流石ネプテューヌ。ならば、チカ！」

「了解ですわお姉さま！」

突然背後にチカが現れ、羽交い絞めにされる。チカがこんなに頭が回るわけがないとすると、ベールの入れ知恵エ！？

「ちょ、ベールウ！？何、何！？私に何か恨みあった！？心当たり多すぎてどれだかわかんないんだけど！？」

「ネプテューヌ……。あなたは私たち女神のアイドルなのですよ。」

「アイドルなんてちょっと前ノワールに決定したじゃーん！ダントツ一位でー！」

「それは人間にとって。私たち女神にとってのアイドルはネプテューヌ！又ただ一人……。ああ、かわいらしい顔……。舐めたくなくてきまずわ……」

そういい、本当に舐めだしそうなほど至近距離まで顔を近づけるベール。ホント勘弁してっばあ……

しかも後ろのチカも息が荒い。え、女神だけじゃなくて教祖も？

「そうですわお姉さま。折角アイドルがあちらから来てくださったのですから、うんと歓迎するのは如何でしょう？」

「そんなのは当然よチカ。これから、ネプテューヌコスプレ写真全集を作成するわ！」

「な、なんですって……！お姉さま、それは最大の禁忌！全世界を敵に回すおつもりですか……！？」

「確かに、これは茨の道……！しかし、女神に、私に後退はない！あるのは制圧・勝利のみよ！いいわねチカ！」

「流石お姉さま！」

顔を声の方向に向けると、私は目を白くした（多分）。
あいちゃんが、こんぱを背負って空中を走っていたからだ。こう、
ダカダカダカッって音がしそうな感じに。

「あいちゃんとかんぱ！？あんたら何してんの!？」

「あいちゃんと空中でーとです〜。」

「いや、その空中って部分聞いているのよ、空中!」

「あら、忘れたのねぷ子？私はゲームギョウ界を駆ける一陣の風にしてコンパを包む天。アイエフよ。空中走行ぐらいたやすいわ。」

「あいちゃんは人間だって信じていたんだけど……」

「人間よ。そう、人間が空を飛ぶ方法は単純だったのよ。右足が落ちる前に左足を上げ左足が落ちる前に右足をあげればよかったの!」
「それで人間が飛べればこんなプロセツサユニットいらないわよ!」
「だが、私は飛んでいる！愛するコンパを背負ってゲームギョウ界の空を駆けているのよ!」

「…まあ、確かにそうだけど」

「じゃあねぷ子、私たちはこれからラスティションにいくわ。またね!」

「またねです〜。」

「はいはい、またね……。」

空中なのにダカダカダカと音を立てながら、二人は走り去って行った。

……ロムラムの二人を信じて、ルウィーに行ってみよう。
嫌な予感しか、しないのだけど……。

…あ、忘れてた。

「こんぱ、あいちゃん。結婚おめでとう。」

聞こえてるかわからないけど、一応そう、言っておいた。新婚旅行

のようだったし。

うん、ああいつの見せられると、羨ましく思えるのよね…

「幸せになるからねええええええええええねぶ子おおおおお・・・」

……聞こえてたんだ。あいちゃん。

2・・・空は気合で走れるらしい(後書き)

正直すまんかつて(ry

3 . . . 一番強いってなんだかんだでDMだよね (前書き)

風音椿ちゃん、お許してください！

∴正直この一言につきるような。

3・・・一番強いってなんだかねでDMだよな

ルウィーに到着。教会塔の上層部にある展望台に着地し、女神化を解く。

こんな何度も女神化したり解いたりしていいんだかねー。シェアの消費がマツハになりそ……………さむうっ!?

流石に女神化してる時よりかはともかくこのミニスカでルウィーの気候はヤバいつて!何でブランつてあれで平気なのいつも思うけど!

とにかく急いで屋内に入り、エレベータによって下層に向かう。あーさむさむ……。女神化したい……………。
…あ、ついた。

「やつほー!遊びにきたよーブラー……………あれ?」

謁見の間に入ると、また誰もいない。いや、もしかしてどこかに潜んでいるかもしれない。

愛刀【レーヴァテイン】を抜き、周囲を警戒。

ブランが奇襲をしかけてくるようなタイプには思えないんだけどなあ……………。

「おいネプテユーン、人ん教会ちで何してんだ」

「わひゃあああああ!?!」

急に声をかけられ、その声の方向、真後ろにレーヴァテインを振る。目を開けると、若干涙目のブランが尻餅をついていた。かわいい。

「て、てめえ……………いきなりなにすんだ……………!」

「いや、ごめんごめん……!」

「何で当てねえんだよ!」

「……………えっ?」

……………うん、何かおかしいことになってるとは思ってたよ。

でもね、ブラン。きみはどちらかと言えばDSのほつだと思っ
たんだけどなあ……………。

「そ、その剣、痛そうだろ……? ロムとかラムにたたいてもらっても、
全然痛くねえし……………」

「妹に何を教えているんだいブラン」

「ほ、ほら! あいつらって結構素直なところあるだろ!?! だからさ、
うまく教えればきつと……………」

「その先は言わないでね、お願いだから。ブランのイメージとか崩
れるから」

「そんな、イメージとか考える前に、私を殴れよ!」

「そんな思いつきり言うようなことじゃないからねそれ」

「ああもっ、まだるっこしいな!」

そう言い放ち、ブランは女神化して私にハンマーを向ける。

…教会の中で暴れるとミナちゃん辺りが怒りそうな気がするけど…
このブランならわかかってやってやってそんな気がするけど。

仕方なく私も女神化し、ブランと対峙する。

……………緊迫した空気が、謁見の間に流れる。

心なしかブランの目が期待に満ちているような……………

「おい、ネプテューヌ……………」

「……………何?」

「お前のそれに切られたらよ……………痛いのか?」

「死ぬほど痛いと思うけど。」

「そうか!」

「喜ばないでよ」

「だったらよお……!それで私を切ってくれえええ!」

ハンマーを投げ捨て、私に向かって飛び込むブラン。

私は冷静に横に躲し、脚を振り上げてブランに踵落とし。

「はぶっ!」

「…ブラン?流石にロムとラムの教育に悪いと思うんだけど……。」

「んなの知るか!私はネプテューヌに痛くされるのが好「やかましい」ばおっ!」

倒れたまま顔を上げるブランの頭をそのまま踏む。

あー、なんだろう。これじゃあ私がいじめてるみたいじゃないの…

「それで、ブラン?満足した?」

「するわけねえだろ!ネプテューヌに痛くても気持ちよくされた」
ごめんブラン、もう少し黙ってて「はぶっ!」

これ以上喋らせると色々と危ないので頭に座り黙らせる。

…うん、ブランがこの惨状だとロムとラムも絶望的でしょうね
……。

「……(も「も」)」

「…ん?何、ブラン?」

「俺たちのギョウカイでは「褒」うん、黙って「ありがばふっ!」

……どうしよう。これ。

「あ、あんたプラネテューヌの女神！」

「こんにちは……。」

「ああ、ロム、ラム……。」

「ちよつと！一人だけお姉ちゃんに座るなんてずるいわよ！」

「わたしも、すわりたい……。」

「……えっ？」

「わーい！おねえちゃん椅子ー！」

「いすー……。」

「もぶっ！ぼむっ！」

ロムとラムがブランの背中とおしりに飛び乗り、私の下からくぐもつた声が聞こえる。

流石にそろそろ泣き出したりしそうだけど……

「ブラン、大丈夫……？」

立ち上がり、ブランから少し離れる。決してドン引きしているわけではない。はず。

「ハッ、俺を舐めんじゃねえ。ロムとラムは軽すぎて全然苦しくも気持ちよくも「ラムちゃんワインド！」「ほぶっ！？」」

ラムの杖の一撃を後頭部に受け、ブランの頭がまた床に沈む。もう何回目なんだろう、これ……。

「えーっと、ラム、ロム、ブラン。私、そろそろ帰ろうかなーって……。」

「えー。これからお姉ちゃんをいじめるのよ！あんたも付きあいな

さい！」

「おねえちゃんにとっては…ごほうびなんだって……。」

ブラン…。妹の教育ぐらいしっかりしましようよ…。私が言えたことじゃないけどね…。

…あれ、ちよつと待って？

「ねえロム、ラム？ミナはどこ？」

「ミナちゃん？……どうだったっけ？ロムちゃん？」

「ミナちゃんは……きょーそしゅーかいだつて、言つてた……。」
「教祖集会……？リンボックスにチカいたし、いーすんも（色々とおかしいけど）いつも通りだったし…。まあいいや。それで、そのブランどうするの？」

「こーするのっ！【エアブラスト】！」

ロムとラムがブランの上から退き、ブランを竜巻で巻き上げる。

ブランのプロセッサユニットが徐々に切り裂かれ、見事に子供に見せられない一歩手前な姿に。手馴れてるわねラム。

「さ、お姉ちゃん？どうしたらいいかわかるよね？」

「……………。（ぴしっ）」

ロムとラムってお姉ちゃん子だったような気がするのだけど…ある意味変わってないのかもしれないわね…。それおを言えば、女神なんて全員シスコンか。チカ含め。

それはともかく、ロムとラムに杖を突きつけられたブランが顔を真っ赤にしながらも嬉しそうにしていた。こいつ、真性のDMだったのね。

「ロムと、ラムの……なんでもいいから、私をいじめてくれ…！」

「口の訊き方がなってない！ロムちゃん！」

「……………【アイシクルトルネード】。」

「【エクスプロージョン】！」

氷の竜巻でブランの肌が凍りついた直後にブランの周囲に小さな爆発が数発起き、ブランについた氷を解かすと同時にブランの肌を焼いていく。

「ひ、ぐうっ……………！」

「ちよつと、ブラン！大丈夫！？」

ブランに駆け寄り、抱き上げる。

私と違って変身しても身長が変わらないブランはかなり軽かった。ブランの綺麗な肌が、氷付いたり焦げたりで、かなり見ていて痛々しい。

「ロム、ラム……………！あんたたち、なんてことを……………！」

「ま、て、ネプテューヌ……………」

「ブラン！？こんなことしていたら、ブランは……………！」

「構わねエよ……………。私が頼んでるんだ…。それに、ネプテューヌにこうして抱かれるんなら、悪くねえ……………」

「あーずるーいおねえちゃん！私も私もー！」

「わたし、も……………」

「ちょ、あんたたち！？きゃあつ！？」

ロムとラムがブランを抱えた私に飛び込む。

流石にこれほどの体積を持ち上げられるはずもなく。私は押しつぶされることに。

「はあ……………。どうしてこうなるの……………」

「おいロム、ラム！もうちょい体重かけろ！苦しくないだろうが！」

「はーい！」

「はーい……。」

「ちょ、今私が一番下だからむぎゅっ！！！！？」

……今度ルウィーに行くときは、ドSな人を連れて行こう。がすと
とか。

3 : : 一番強いのもってなんだかんでドMだよな(後書き)

「ジャツジルム」

ジャツジ「結局俺一人かよ……. ったく、なんでこつちでまででしゃばらないといけねんだよこつちだと俺たちザ・ハードなんて全滅してんだからな、死んでるからな？ハンシンとかこつちにいねえからな？」

ジャツジ「……まあいい。さて、何を話せばいいんだか……。ああ、一応今までのまとめ……はラストイションに行った後でいいな。」

ジャツジ「一応作者からのフォローだが、あのガキ二匹。あいつらはよくわかってない。姉の白いのに言われるままやってるだけだ。まあそのまま育てばDSだろうけどな。殺すことにたけている俺は殺さないことも長けている。死なない程度の拷問術なら心得てるぜ？」

トリック「ガタツ」

ジャツジ「テメエは座ってる。また次回。」

4・・・行動力のある変態ほど恐ろしいものもない(前書き)

久々の更新。いや、暇だったの。思いついたの。
あとノワールファンの皆様、お許してください！

4・・・行動力のある変態ほど恐ろしいものもない

ラストイション到着。

何か今まで物凄く長い間飛んでいた気がするけど……まあ気のせいでしょう。

ラストイションは多段階階層都市というひとときわ目立つ街並をしてい
る。

最上層部に教会等行政関係の建物が、その一つ下には裕福層等々、
階層が下がるごとに町並みも徐々に変わる。

最下層はいわばスラム街＋港。過去、ラストイションで最もマジエ
コン又信仰が起こっていた場所。

……縋りたくなる気持ちも、わかるにはわかるのだけどね。

「ノワール？」

「…おや。君かネプテューヌ、いや、その姿の時はパープルハート
と呼ばう。ブラックハートに用かな？」

「…ああ、ごめんなさい。解くのを忘れていたわ。」

うつかり。私はラストイションに到着してから教会に入るまでこの
姿でいたのだ。

なんとという失態。侵略の宣戦布告と取られかねない。

変身を解き、急激に目線が目の前のケイと同じぐらいになった。う
わああ。

「いやーごめんごめん。ちょっと何度も変身しててねー。」

「僕に女神の心境はわからないがね。ノワールなら先ほどここに
いたよ。どこかに隠れているんじゃないかな？」

「僕は君にノワールから助けるといふ投資をしたんだ。それに値する報酬は貰いたいね……。」

「それがキツスってどうということなのさあ！？私ふぁーすとだから！私まだ純情だからー！」

「世の中ギヴアンドテイクだ。悪く思わないでほしいね。」

「強制交渉はんたーうい！ノワールー！」

「のーわーるーキック！」

「おっと。」

ケイが引いた途端、そこにケイがいた場所にノワールのドロップキックが通った。通り過ぎたノワールはそのまま壁を蹴って宙返り。びゅーていふぁー。

「ケイ！よくも私のネプテューヌねぶねぶ計画の邪魔をする気ね！」

「君の計画はわかりやすすぎるんだ。もう少し頭を使ってひねることをオススメするよ。事実僕に利用されたんだからね。」

「いくら姑息に動いても最後に勝つのは私！何故ならネプテューヌは私の嫁だから！そうよねネプテューヌ！」

「ノワールは私の嫁ーとかなら言った覚えあるけど……。」

「ほら！ケイ！私達はもはや相思相愛なのよ！」

急激にハッスルしだしたノワールが私を抱き寄せる。

ちよ、ノワールさん、その胸部にあるたくましいものが顔に当たってる！嫌味！？嫌味なの！？私だって変身すればあるよ！

ていつか息できない！ぷりーずぶねす！ぷりーずへるぶみー！

「ふっ、甘いねノワール。僕の策はまだ尽きてはいないよ！」

「へえ、やってみなさいよ、このネプテューヌの嫁、ノワールに対してー。」

ああ……！」

追ってきたあああああああ！？

わざわざ女神化しているノワールが物凄い形相（幸せそうにとろけた顔）して追ってきた。

今までそこまで追おうとしたのいなかったわよ！？

と、とにかく、ノワールに捕まったら一巻の終わり、

晴れてノワネPENDよ！？私はノーマル！私はノーマル！

出来るだけ早くルウィーに向かって飛ぶが、それでも追ってくるノワール。スピードじゃノワールに勝てない……！！

「超ローアングルさいこー！ネプテューヌ！もうちょい足開いて！」

「もういやあああああああ……！」

私とノワールの叫びは、「うるせえ！うるさくすんなら私を殴れ！」とブランが割って入るまで続いた。

……その止め方もどうなの、ブラン。

4・・・行動力のある変態ほど恐ろしいものもない（後書き）

（その頃のプラネテューヌ）

いーすん「あ、ネプギアさん。今日のネプテューヌわっしょいの放映時間ですよ。」

ネプギア「もうそんな時間ですか！？早くいかないと！」

TV『今日の！女神日和！』

いーすん「嗚呼……。ネプテューヌさんで埋め尽くされたスタジオ。ネプテューヌさんで埋め尽くされた番組。最高ですね……。」

ネプギア「そうですね…。やっぱりお姉ちゃんが一番だよ……。」

いーすん「しかし、いくら妹のネプギアさんでもネプテューヌさんは渡しませんよ?。」

ネプギア「それは私の台詞ですよいーすんさん。」

TV『今日のネプテューヌは……おおっと！放送コードギリギリの画像が届いています!』

いーすん・ネプギア「まずはネプテューヌさん（お姉ちゃん）の画像を愉しましょう。」

5 . . . ドM + 変態 + ヤンデレ || カオス (前書き)

私は何がしたかったのか最近分からなくなってきた…
ただギアテュー又前提のネプハーレムをやりたいかっただけのはずな
んだが……。

5・・・ドM＋変態＋ヤンデレ＝カオス

「ネプテューヌネプテューヌンネプテューヌねぶねぶねぶねぶねぶ
ぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろ」

「あ、や、あああう……！も、やめてよ、ノワール……！」

「ぺろぺろはむはむハアハアハアハアねぶねぶううううううう
う……！」

「誰か助けて……………」

ルウィー上空。ノワールから逃げ続けた私は結局教会の真上で会え
なくノワールに捕まってしまった。

正直嫌な予感是一直はしていたんだけど、ね……。

延々と身体を舐めまわされ、変な気持になって……。脱力していつの
間にか私の女神化も解けていた。

このまま落ちたら間違いなく死ぬ。

つまり、私は落ちて死ぬか、ノワールにこうやって舐められ続ける
しかないということ。

それ以前に、身体が全く動かず、ノワールを振り払う気力すらない。

「くうおらてめえらあああああああああああ……！！！！！！

！……………！！」

「な、に……？」

「ブラン……！？」

…あ、ブランだ。

何かべとべとしてるけど…………。

「人ん教会ちの上でいちゃこらしやがってよ！さっきから私に何かべ

とべとする液体落ちてきてんだよ！気持ちいいじゃねエか！」

「あ、それ私の唾液よ！返しなさい！ネプテューヌに塗りたくるから！」

「誰がやるか！そんなことよりもっと、私に唾を吐け！できれば見下したような目でウザッ…とか言いながらでな！」

「ウザッ……………」

「あ、つくう…………… そ、その視線だよ……………！」

「物凄く怪しいよブラン……………」

突然身悶えだすブラン。

ノワールも物凄く目が冷めてるし、何この状況……………。

あー、ロムかラムが助けてくれるといいな……………。

「ふ、う…………… さい、こう……………」

「物凄く台詞が危ないよブラーン……………」

「ブラン、私はこれからネプテューヌと空中【自主規制】するんだから帰りなさい！ほーむ！」

「ざけんな！ここはルウィー領空何だよ！プラネテューヌかラスティションでやれ！ここでやるんなら……………！」

「やるんなら……………？」

「私も混ぜろ！できれば二人から激しく、壊れるほどにだ！」

「そんな暴露いらぬから！」

「私はネプテューヌしか愛さないわ！愛の無いSMに何の価値があるというの！？」

「そういう問題じゃないよノワール」

「愛がこもっていようがいまいが、私は痛くされるのが好きなんだ……………」

「それはそうやって暴露することじゃないよブラン」

もうだめだこの子ら。

誰か助けてー。

しゃりーん。

突然、鈴の音が聞こえた。

……鈴？こんな空中で……？

しゃりーん。

しゃりーん。

「一つ与えて悦ぶか……。」

「何だ……！？」

「この声、ネプギア……！？」

「二つ奪って哀しむか……。」

「ものすごく嫌な予感しかしないんだけど……。」

「奇遇ねネプテューヌ、私もよ結婚しましょう。」

「お断りします。」

「三つ抱いて苦しむか……！さあ、あなた達の罪を数えてください、ブラックハートとマゾヒズムハート！この私、パープルラバーズが成敗します！」

そこには、紫色のマント（どっから用意したんだろう）を羽織り、おそろくいーすんの仕業だろう仮面（と言うよりメガネ）を付けたネプギアがいた。余裕あるねネプギア。顔出てるよネプギア。

「ネプギア、何してんの……？つかいーすんは？」

「いいえ、私はネプギア、パープルシスターではありません。愛の使者パープルラバーズですおねえ……ネプテューヌ「今お姉まで言

ったよね、お姉ちゃん聞いてちゃったよ」「な、何のことでしょうか？」
「おのれ、ラブズシスター！私のネプテューヌを奪いに来たのね！
私の愛は純粋にネプテューヌを求めているわ！」同性の時点で純粋
じゃないことに気付こう？」

「テメエが誰だか知らねエが、どうやらやる気らしいな！私を愉し
ませろよ！」ブランが言うとなんか変な感じ。あとマゾヒズムハ
ト否定しようよ」

乗ってるんだよね？ノワールもブランも乗っててやってるんだよね
？マジだったらねぶ子さん泣くよ？

ノワールを悦ばせるだけだとわかってはいても泣くよ？

誰かー……へるぶみー……。

6・・・暴言は使い方
で人を救える(前書き)

読者様、お許しください！

6・・・暴言は使い方て人を救える

「……むむむ」

「……ぬぬぬ」

「……ぐぐぐ」

「はあ……」

マント姿のネプギアと、女神化したノワールとブランがにらみ合う。そして相変わらずノワールに抱かれる私。脱力系女神ねぶ子さん。うん、微妙。

「やりますね、ブラックハート……そしてマゾヒズムハート……。流石は女神、と言ったところでしょうか……」

「フツ……その程度なの、パープルバース、貴女の愛は……！」

「俺を満足させるにはまだ足りねえぞ三下ア……？」

「ただ睨み合っただけだよな？何をどうやったらそれわかるの？ねえ？」

特に武器を出そうともせず、ただ睨み合う三人。

あとノワール。バレてないと思ってるのかもしれないけどスカートに手入ってるのおもつきしバレてるからね。ていうか一向に脱力感取れないの絶対この所為だよな。

「このままでは埒が明かないわ。ここで一つ、私は勝負の提案をさせてもらう。」

「あ？」

「……聞きましょう。」

「ネプテューヌと交互にやって一番ネプテューヌを悦ば「死ぬ変態女神イ……」べふっ……？」

軽く身を翻し、ノワールに踵落とし。

その衝撃で私はノワールの支えを失い……………あ。

「によわああああああ……………!」

重力に身を任せて同化した私は、ものの見事に落下。真下は白。うーん、雪でもこの高度なら死ぬと思うな……………。

と、突然誰かに抱きかかえられた。

…?

「ふふツ…………。私に勝つことを優先しすぎた結果ですね。おねえちや…………。パールハートは私が貰います。」

「もう言いきっちゃえよ。もうわかってるんだよネプギア。」

「私はパールラバーズ。ただの愛の使者です。」

「顔見えてるよ。」

「…………!??」

慌ててマントで顔を隠すネプギア。バレバレだよ。うん。

あとね、ネプギア…?

「何で私のスカートを掴んでいるのかな?」

「いえ。これも愛の一環なんです。エロスの愛です。」

「それただのエロスだよね!? ちょ、それはまずいってネプギア!

これ全年齢対象だからねー! 私まだ清纯な女神でいたいのに!」

「私はパールラバーズです。」

「だからスカートを掴むのはやめて、ねえ?」

そんなカオスな状態で、一番の救世主が現れたのかもしれない。

「あんたら全員、臍でも噛んで死んじゃえばあ！」

暴言ばっかの彼女、ユニが。

今は救世主に思えた。

6・・・暴言は使い方て人を救える（後書き）

「その頃のラスティション」

ケイ「全く。あの二人にも困ったものだよ。」

ケイ「……ああ。僕だ、ケイだよ。市場のネプテューヌ写真を秘密裏に全て買収するんだ。二つ残して高額で売りさばくよ。」

ケイ「……ノワールには悪いけど、僕もネプテューヌの教祖やりたかったな。」

7・・・リーダーって、優しいほうがいいのか厳しいほうがいいのか意見は分かち
あすきです。
わたくしがすきなきゃらはあいえふです。でもぶらんのほうがもっと
すきです。
本当です。

7：リーダーって、優しいほうがいいのか厳しいほうがいいのか意見は分かち

「あんたら、国の最高権力とその候補生だつてことわかつてんの？それが他国の女神にベタ惚れで仕事ほつたらかして変態行為？あんたら女神舐めてんじゃないの？女神は種族じゃないのよ？役職よ？仕事よ？そんなこともわからずに勝手に女神化してシェアの無駄使いしてんじゃないわよ殺すわよ？」

正座するネプギア・ノワール・ブランの三人の前で仁王立ちして説教するユニ。シユール。

落ちてきたユニによって気絶していた三人だったけど、その後ユニに全員字の如く叩き起こされていた。

ブランは喜んでいた。

「ほ、ほら、ユニ？私仕事終わらせてつたし」

「終わつてねえよ。ほとんど私に押し付けてつただろうがポケ姉？お蔭でラステイションのシェアが昨日比で0・19%落ちてるんだからなコラ。」

反論したノワールに論破付のアイアンクロー炸裂。ギリギリ言うてる。

「此処はそもそも俺の国だぞ。俺は領空でイチャイチャしてるノワールとネプテューヌを追いだしに出ただけだ。」

「その行為自体は褒められたものだけどなら何でこんなこと言うてるの？」

ユニが取り出したのは……スイッチ？

『人ん教会の上でいちゃこらしやがつてよ！さつきからべとべとす液体落ちてきてんだよ！食い持ちいいじゃねえか！』

『あ！それ私の唾液よ！返しなさい！ネプテューヌに塗りたくるから！』

『誰がやるか！そんなことよりもっと、私に唾を吐け！できれば見下した目で……』

ノワールから突然、ブランとノワールの声が聞こえた。

……レコード？録音してたのかな？

「……止めにいった、ねえ……？」

「うぐっ……。」

「ユ、ユニー！？私に何したの！？」

「ケイの提案で姉さんに録音装置を付けたわ。また姉さんが馬鹿始めた時にぶち殺す……じゃなくて、お仕置きするためにね。」

「……。」

「……。」

「で？何か反論ある？馬鹿姉とドM。あんたらが国纏めたらすぐ国が破産するわ。ノワール降ろして私がラストイション女神としてルウィー統合してあげましょうか？」

「ちょ、ちよつと待て！それじゃあロムとラムはどうなるんだよ！」

「そうね。まずは女神としての教育を徹底的にやらないとね……。少なくとも悪戯なんてふざけたことやめさせないと……。」

「ゆ、ユニー……？それは、ちよつとやりすぎなんじゃ……。」

「やらなさすぎだった結果があんたらなんだけど？馬鹿やった後始末は荒療治でもしないとダメなのよ。そうでもしないと国が持たないわ。ああもう、帰ったらケイとルウィーとの統合計画の話し合いしないと……。」

「うつつ……。」

「……。」

ずらずらと並べていくユニ。昨日までノワールの後ろに隠れて必死に勉強しているような健気な子だったような気がしていたんだけど、成長したなあユニ。
そして一気に退化したなあブランとノワール。

「はい、そういうわけで教会に戻った戻った！仕事はまだまだ残ってるわよ！」

「は、はい……」

「応……」

ブランとノワールが女神化し、飛び去って行った。

ネプギア。骨は…、あ、残らないね。光粒子化するもんね。

「さて、ネプギア……？あたしはこれでもあなたのことは友達だと思っていたんだけど……？」

「あはは……えーっと、ユニちゃん、仕事熱心ですごいんだねー」

「あなたは仕事どうしたわけ？候補生にも仕事は大量にあるはずだけど。」

「わ、私の分は終わらせたよ！いーすんさんと一緒に！」

「そう。ならいいわ。ただね……。女神協定第134条。女神候補生は女神を手本とし女神を補佐するもの。……あなた、何してた？」「いや、えっ」

ネプギアが言いよんだ途端。ネプギアの頭に強烈な回し蹴り直撃。見えた。

大きく吹き飛ばされたネプギアは仰向けでスライディングが如く雪の上を滑った。そしてユニは追撃でネプギアの背中を踏んだ。もう何も怖くないポーズ炸裂。

「女神を補佐する立場の女神候補生があることか女神の暴走の便乗？あんたも女神候補生の自覚足りてないんじゃない？やっぱロムとラムの二人はなんとかスコン解消してもらって女神としての教育を……でもミナがそんなことできるわけないしなあ……。」

「ゆ、ユニー……。その辺にしといたげてー……。」

「そもそもの原因はあんたよネプテューヌ！あんたが姉さんもあのDMもベールさんまで誑かすからこんなことになってるのよ！！」

「私だって何でこうなってるのか知らないんだよう！？」

「チツ……。ネプギア。あんたへの説教はまた今度よ。イストワールさんに説教されてきなさい。」

「あ、あの、ユニちゃん……。？足どけてくれれば、それはとっても嬉しいなって……。」

「そ。」

ユニがネプギアの後ろ襟をつかみ、頭上に投げ捨てた。即座に女神化して体勢を整えるネプギア。荒いわねー！

「はい。じゃあさっさと帰ってイストワールさんに説教されてきなさい。」

「うう、わかりました……。」

ネプギアもプラネテューヌの方向に飛び去って行った。

そして、残ったのは私……。なんだろう、嫌な予感がする。

「さて……。最後にネプテューヌ。あんたへだけ……。なんでさつきからそこにいんの？」

「いや、ちよつと、ノワールにやられて……。」

「……あの馬鹿姉、またなんかやったわね……。あとでLv2の拷問しないかね……。」

「お、お手柔らかにね……。ほら、あんなでも私の嫁だから……。」

「あ？」
「なんでもありません！」

「ネプテューヌが仕事を一切しないのはそれこそゲームギョウ界全域で知られていること。」

「すみません……………」

「はあ……………ま、姉さんが迷惑をかけたこともあるし。少しラストイションで教育させてもらうわ。ケイからイストワールさんに連絡させないと……………」

振り返ってぶつぶつ言い始めるユニ。

……………あれ？今、顔紅かったような……………。

「ねえユニ……………？今、顔赤「あ……？」すみませんなんでもないですゆるしてください」

物凄く怖いんです。ユニの目が恐ろしく怖いんです。マジエコンヌなんて目じゃないほど」。

トラウマになるよこれ。誰か助けて！へるぶ！

「さて。じゃあ行くわよ。」

「ふえ……………？」

「姉さんへの拷問と、ネプテューヌの教育、あとルウィーとの統合計画……………ああ忙しいったらないわ！」

ユニが私を背負い、飛び立った。

正直勉強とか仕事とかは面倒だし嫌な部類だけど、助かった。

今このときは、そう考えていた。

このときだけは。

7・・・リーダーって、優しいほうがいいのか厳しいほうがいいのか意見は分かち

くそのころのルウイー教会

ラム「おねえちゃん帰ってこないねー。」

ロム「こない、ね……………」

ミナ「散歩……………とは言っていました…。何も無いといいいのですが……………」

ラム「あ、そーだ！ねーねーラムちゃん！次おねえちゃんいじめるときは、わたしが頭に乗つかるね！」

ロム「うん……………。わかった……………」

ミナ「ああもう、ラム様もロム様も。あんまりいじめるとか言ったりしたりしてはいけませんよ？」

ラム「でもー。おねえちゃんがやれっていうんだよー？」

ロム「だよ……………？」

ミナ「それでもですー！ー！」

ラム「はーい……………」

ロム「はーい……………」

ミナ「ブラン様も、あまり気負わずとも私がいるというのに……………」

8・・・一番恐ろしいのは変態でもドMでもドSでもない。無限ループっていいす

今回で無理矢理最終回。

何かギャグ、私には無理だったかもしれない！

うん、御免ね色々。

8・・・一番恐ろしいのは変態でもドMでもドSでもない。無限ループっといーオ

それからというもの。

ラストイションに連れてこられた私は、ユニとケイから【女神のなんたるか】をみっちり教え込まれていた。

ぶっちゃけネプギアといーすんのセクハラ（と言つ名の監禁）から逃げたかったのもあって、割と真面目に勉強していた（私らしくもなく）。

のだが……………

「はい次、女神協定第137条。姉さん答えて。」

「ネプテューヌは世界遺産よ！」

「死ぬ馬鹿姉。女神協定第137条。女神及び女神候補生は他国の女神または女神候補生と無暗淫らな関係を持つことを禁ずる。ぶっちゃけネプテューヌさん以外の女神三人協定ぶっちゃぎりで投げ捨ててるのよ！」

「あはは……………」

「ネプテューヌを愛することの何が悪いの！」

「全部だよボケ姉」

問題をあげるとするならそう、ノワール。

何故か私と一緒に授業に参加させられている。なんでなんだろう。

ラストイション教会の一室。教室風に改造された部屋に二つの机と教卓。

机に私とノワールが座り、目前の教卓にユニが乗っている。

何かがおかしい気がする。

「全く……。次、女神協定第138条。ネプテューヌさん読んで。」
「あ、はい。【138条、女神候補生の権力は女神に準じる物とし、行使することはできない。】」

「はい。私やネプギア、ロムとラムは女神候補生ということですね。次に権力が強い。しかしその乱用を阻止するために女神候補生はその権力は行使できないと定められている。やりたきゃ女神になれつてことね。」

「次、女神協定第139条。姉さん読んで。」

「うー……。【第139条、女神候補生は女神候補生という立場をわきまえ、女神の不利益になる行動は控えよ。】」

「ぶっちゃけていうと私のこれもこの条文アウトスレスレだけど、まあ女神自体がロクでもないし別にいいね。」

(いいんだ……)

「協定はいーん！駄目でしょうユニ！違反しちゃ「黙れ死ね」……

……(、、、)」

うん、今は言っちゃいけないかったよノワール……。

「さて、次は……つと。」

ユニが辞書かと思うような分厚い本を取り出し、読み耽始めた。

……あれ、私らのことスルー？

「……………」

「の、ノワール？ユニ何か止まっちゃったけど……」

「よくあるわ。ユニはああいうあつつい本読むのが好きだからね……。ブランとは違う方面の本好きなのよ。」

「周りの音聞こえなさそうだもんね……。」

「まあ、こういう状態でやるとしたら……ね！」

「ねじゃないよ。全く思いつかないんだけど。」

「何……？そりやもう、何に決まっているでしょ「死ねボケ姉」ガホッ！？」

私に極限まで顔を近づけたノワールが横にふつとんだ。

ノワールがいた場所にはさっきまでユニが読んでいた本「女神協定全書」があった。

……角に血ついてるんだけど。

「ひとが目を離れた隙に何始めようとしたクソボケ。」

「ね、ねぶ愛を深めよう……」

「何がねぶ愛ださっき他国の女神と不純な交友をするなっつたばつかたろうがいい加減ぶつ殺すぞボケ」

「ず、ずびばせん……」

「うわあ……。」

涙目で謝るノワールとそれを踏みつけるユニ。果てしなくシユール。やだ、なにこれ。

というか、本当に懲りないんだねノワール……

「あー、大丈夫ノワール？」

「し、心配してくれるのねネプテユーン……」

「そりやあまあ、ほら。私の嫁って言った……」ま、まあほら、友達じゃん！？」

「ユニの所為でねぶねぶできなくて生きるのが辛い……」

「じゃあ死ねよ私が代わりに女神やるから」

「ノワールですが妹が冷たくて哀しいです……」

「うん、自業自得だよノワール……。」

ノワールが再起不能^{リタイア}し、仕方ないということで授業は中断され、次

週ということに。

…うん、勉強は嫌いだけど、このノリは好きかもしれない。
何よりユニのおかげでセクハラを受けない。コレ重要。

時間が吹っ飛び、夕食時。

ラストイションでも、さすがに女神や教祖と一緒に夕食は取るよう
だ。意外と言えば意外かも。

まア、こんな時に好感度稼ごうとするのはいるようで……。

「ほらネプテューヌ、あーん。」

「あ、あーん……。」

いや、この年になってあーんを体験することになるとは思わなかつ
たよ、うん。

どちらかと言えばネプギアとかいーすんにやる立場だったし……。

「……………」

「随分機嫌が悪そうだねユニ。ノワールがネプテューヌのことしか
考えないのはいつものことだろう?」

「そうだけど……いい加減姉さんも女神としての自覚がさ……。」

「今更だよ。ノワールはああいう子だと割り切れればいい。その判断
が今の課題だね、ユニ。」

「……違反即処罰じゃあダメってこと?」

「処罰してわからせるだけではわからない場合も多い。大事なのは
理解されることだ。」

「……………」

「女神になるころにはわかるさ。君にもね。」

ケイとユニも何か話し合っている様子。ノワールの保護者大変だね

！。
そのノワールは、私にセクハラしようとしてはユニの睨みで止められている。権力弱いね！。

「うまうま。」

「……………」

「はぁ……………」

「……………」

そして、夜。

私はユニの部屋、ユニがノワールの監視の為にノワールと相部屋になったらしい。

そのため、私はユニの寝室にいるわけだけど…………

「これはどういうことなのかな…？」

ゲームギョウ界の一国の女神候補生の部屋とは思えないほど、参考書とか銃器とかで部屋は埋まっていた。

いや、ベールじゃないけどね。ぶ子さんも割とゲーマーだからね。ゲームギョウ界だもん。仕方ないよ。

でもね、レトロゲーどころか携帯系のゲームすらないってどういうことなの？本当にゲームギョウ界の女神なのかいあの子は。

まあ、ないものは仕方ないか…………。文句言えば女神協定全書が飛んできそうだし。

とりあえず眠気の気休めにでもベッドイン。

あーふかふかー。うちの二段ベッドもこんなもこふかになればなー

……
…… あー、なんか眠くなってきたかも。

……
…… まあ、偶にはこういう旅行もいいよねえー……

朝。英語で言えばモーニング。

人間女神モンスター（一部除く）は御目覚めの時間帯。

……あれ、なんかこの展開見たことあるような。

私の両手には、何時かつけさせられた私の手首にジャストフィットする手錠が。

……まさか。

「そんなこと……ないよね？」

がしゃがしゃ。暴れても出るのは音ばかり。

女神化も……多分できないだろう。

……やっぱ、そういうことなんだよね。

少し待つと、怪談を下りるような足音が聞こえた。

8 …「番返るじいのは変態でも下Mでも下Sでもない。無限ループっていい

さーて、明日から真面目にLast Goddess更新しよう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2759y/>

ねぷ子奮闘記！

2012年1月6日00時48分発行